

〔提 言〕

家族看護実践のための教育研修システム構築の必要性

東海大学健康科学部

式守 晴子

2006年9月広島で開催された第13回日本家族看護学会学術集会(森山美知子大会長)には、看護学生、実践者や研究者など多様な背景の人々が多数集まり、看護職者の家族看護への関心の高さが伺えた。これは、看護の対象は個人とその家族という考え方が看護職者に浸透してきたこと、また医療の再編成がすすみ、リハビリテーションの診療報酬が半年で打ち切られるなど、退院促進、在宅ケアへの転換が迫られ、看護師の目が家族に向けられる機会が多くなったことと関係があるだろう。大会では家族看護への関心に応えるように、家族看護の実践を政策や診療報酬にどのように結びつけるかが討議された。家族看護の実践を診療報酬や政策に反映させることは今後も本学会の大きな課題である。

こうした学会の動きを後押しするためには、家族看護のエビデンスの蓄積とともに、家族看護の確かな技術を持つ看護師を多数輩出することが必要である。2007年には家族看護の専門看護師が誕生する可能性が高い。家族看護の専門看護師と共に、家族看護を推進する人々を育て、実践の質を保証することも学会の課題ではないかと考える。

日本家族看護学会では、研究教育推進委員会が、家族看護研修会を学会開催時と年1回以上企画・開催し、多数の人々が参加しているが、学会主催の活動は

開催回数も地域も限られる。広く研修の場を持つためには、選挙ブロックごとなど各地区で研修会や研究会を定期的に開催され、それらが連携し、全国的な教育研修システムを構築することが必要ではないだろうか。このように考えたのは、2006年5月日本家族研究・家族療法学会時、1970年代後半に初めて家族療法の手ほどきをしてくださった恩師に久しぶりにお目にかかり、家族へのアプローチを学んできた経過を思い出したことがきっかけである。恩師からサティアらの家族理論を読書会形式で学び、その後臨床で本人、家族との三者面談をロールプレイによって徹底的に鍛えられた。さらに、事例検討会で他者の事例をもう一度情報整理からしなおし、何が起きたかを振り返る過程で、参加者の意見から家族アセスメントや介入プランについて、多くのヒントを得て、家族へのアプローチとしての技術を身につけていった。

このように理論やロールプレイを通して基礎的概念や手法を学び、さらに実践事例を通して多くの具体的な技術や方法を確かなものにしてゆくことができるだろう。全国に、多様な方法を用いた教育、研修の場を広げ、それらが学会の教育研修システムとして構築されるならば、家族看護実践者が増加し、実践の質の向上につながるのではないだろうか。